

中国長春市におけるフィットネスクラブと会員の実態

董 暘 丸山 富雄

キーワード：フィットネスクラブ，会員，社会階層，事例研究，中国長春市

A study of fitness clubs and their members in Changchun City in China

To Yo and Tomio Maruyama

Abstract

This study was intended to clarify actual conditions of fitness clubs and their members in Changchun City in China, and to compare with those of Japanese counterpart. Two clubs and their members were selected in Changchun City, and questionnaires were picked up and returned by the members in two occasions (September and October, 2004), effective samples collected were 228. From the study were summarized the results as follows:

1. From the literatures, it could be said that, as sports clubs in China were newly introduced, so there were still many problems to be solved.
2. Members of those clubs were young (73.7% was under 30 years old, especially in female), high education, upper non-manual, and upper-middle class in income.
3. About a half of members participated in exercises regularly and their purposes were "health and fitness" or "cosmetics and reducing fatness".
4. Over all satisfactions of the members seemed high in the items of "atmosphere of the club" and "instructors", but rather low in "settings" and "membership fees"

It is the authors hope that in a few years China may catch up with the level in Japan in the area of fitness clubs.

Key words : fitness club, membership, social stratification, case study, Changchun City in China

I. はじめに

1979年、中国政府は改革開放政策を策定し、それ以降中国の経済は急速に発展しつつある。経済の進歩に伴って、中国のスポーツも急速に発展し、競技スポーツの世界ではスポーツ大国の仲間入りを果たした。また大都市を中心に、市民の健康づくりや豊かな余暇生活を目的と

したフィットネスクラブも設立されるようになった。1981年、北京で初めてのフィットネスクラブが創立された。

中国のフィットネスクラブは20年の歴史の中で大きく発展してきたが、WTO（世界貿易機関）加入後、国外の資本が一斉に導入されることも予想され、産業内部の

競争を激化させ、フィットネス産業もさらに発展していくと考えられる。しかし急速な発展の中で解決しなければならない多くの問題もある。

そこで本研究では、これらの問題を解決するため、中国フィットネスクラブの現状と会員の属性や意識について、先行研究と長春市における実地調査を行い、その実態を明らかにすることを目的としている。さらに成熟期を迎えている日本のフィットネスクラブと比較・考察することにより、今後の中国におけるフィットネスクラブの望ましいあり方やその方向性について示唆を得たいと考える。

II. 研究方法

1. 先行研究の検討

フィットネスクラブを含む中国のスポーツクラブに関し、張功偉⁷⁾の2000年の調査結果を概観し、その概要について把握した。

2. 長春市のフィットネスクラブの実態調査

長春市の2ヶ所のフィットネスクラブに関し、施設概要、会員数、会費等について調査を行った。

3. フィットネスクラブ会員の調査

1) 調査対象

- ①長春市国立市民スポーツセンターの会員
- ②長春市浩莎フィットネスジムの会員

2) 調査時期：第一回：2004年9月5日から

2004年9月16日まで

第二回：2004年10月2日から

2004年10月16日まで

3) 調査方法：留め置き法によるアンケート調査。有効回収数は228であった。

4) 調査内容

- ①会員の属性（性、年齢、婚姻状況）
- ②会員の社会的地位（学歴、職業、所得、生活様式）
- ③クラブ参加の実態（参加形態、参加の目的、満足度）

III. 結果と考察

1. 中国スポーツクラブの概要

張功偉の先行研究から、フィットネスクラブを含めた中国のスポーツクラブの現状や課題は次のようにまとめることができる。

スポーツクラブの活動目的で最も高いものはフィットネス型であり、活動内容はエアロビクス、トレーニング、大ボール、小ボールなどが一般的である。また参加者は圧倒的に30歳代以下である。クラブの抱える問題としては、経費が足りないことや、場所や施設が不足していることなどが指摘されている。クラブの今後の課題として、

国の規制緩和と優遇政策、専門の管理士・社会体育指導員の育成、体育協会等関係団体との強化などの要望が挙げられている。

2. 長春市のフィットネスクラブの現状

1) 長春市国立市民スポーツセンター

中国政府が2005年までに全国10ヶ所に設立を計画している大規模フィットネスクラブの一つで、2003年9月に開業し、現時点では中国東北3省の最大規模のフィットネスクラブである。

【規模】6階建て、総面積36880平方メートル、駐車場33台

1階：受付、プール、スポーツ用品売店・レンタルコーナー

2階：卓球台8台、ビリヤード台30台、インタネット200台、子供の遊戯場220平方メートル、バドミントンコート6面

3階：トレーニングジム

4階：バスケットボールコート1面、テニスコート2面

【会費】会員制及びビジター制度をとっている。プール、トレーニングジム、テニスには月会員及び年会費を募集しているが、その他は120円で全館（テニスコートを除く）利用できる。

	1時間	月会費	年会費
トレーニングジム	15元	280元	1800元
プール	20元	300元	2100元
テニス	110元	2000元	15000元

それぞれ単独で施設を使用する場合には、1時間、下記の料金で利用できる。

- ・卓球：10元
- ・ビリヤード：10元
- ・子供ランド：20元
- ・インタネット：3元
- ・バドミントン：30元
- ・バスケットボールコート：5元

【指導者】40人

(内訳) プール：5人 卓球：2人

バドミントン：6人 トレーニングジム：16人

バスケットボール：5人 テニス：6人

2) 長春市浩莎フィットネスジム

長春市における最初のフィットネスジム。市内に現在3店舗を展開し、長春市では人気の高いクラブである。

【規模】

1店：2000年11月14日開業。6階建て、総面積3110平方メートル、駐車場はなし。トレーニングジム、卓球、ビリヤード、シャワー室がある。

2店：2001年2月1日開業。6階建て、総面積3409平方メートル、駐車場15台。トレーニングジム、卓球、ビリヤード、シャワー室がある。

3店：2002年6月9日開業。7階建て、総面積3797平方メートル、駐車場はなし。トレーニングジム、卓球、ビリヤード、シャワー室がある。

【会費】長春市浩莎フィットネスジムはすべて会員制であり、会員は申し込み店だけ利用できる。統一的な会費は次の通りである。

月会費：218元 半年会費：868元 年会費：1548元
これとは別に学員会員があり、この会員はクラブの定期的な教室に参加できる。学員会費は次の通りである。

月会費：418元 半年会費：1668元 年会費：3028元

【教室】長春市浩莎フィットネスジムの会員の7割以上が学生であり、様々な専門の教室が大人気である。武術、ダンス、太極拳、柔道、空手道の教室が設置されている。

【指導者】全員で31人おり、その内、半数以上は学校体育教師である。その他、大学教授1名、助教授3名。

3) 日本のフィットネスクラブとの比較

仙台市にあるキリンスポーツクラブを視察し、またインターネットからその概要についてデータを得た⁵⁾。キリンスポーツクラブは日本でもかなり充実したクラブであるが、中国長春市のフィットネスクラブとの比較を行うことにする。

【規模】1994年1月17日開業、2階建て。建物延床面積6256平方メートル。その中に様々な機器を配したアスレチックジム、温水プール2面、スカッシュ・ラケットコート4面、シャワーやサウナ・化粧室を有したロッカールームが男女別に4ヶ所、さらにはマッサージルームやレストランがある。

屋外にはテニスコート6面、フットサルコート2面、さらにはゴルフ練習場、また駐車場が完備されている。

施設の規模、設備内容ともにキリンスポーツクラブの方が充実しているが、特にプールやテニス、ゴルフ場のスポーツ施設は中国ではまだ一般的でないこともあり、その差が明らかである。またロッカールームやシャワー・サウナ室、レストランなどのアメニティ空間の設置も中国でも見習う必要がある。

【会費】キリンスポーツクラブでは、いわゆる一般会員である「マスター会員」の他に、利用できる施設や「モーニング会員」のような時間帯による会員を定めるなど、細分化された会員制度と料金体系を採用している。その結果、約3500人の会員を集めることにも成功している。今後、中国フィットネスクラブにおいても、このような会員制度と料金体系によって会員獲得を図る

必要があるだろう。

【プログラム】キリンスポーツクラブでは会員に対し、様々なプログラムをほとんど無料で提供し、サービスの向上と会員の維持・獲得に努めている。

その他に、会員が自主的に結成したテニスや水泳、バスケットボール、フットサルなど8種類の同好会やサークルがある。

このようにキリンスポーツクラブでは、きめの細かいプログラムサービスと同好会・サークルへの支援を行っている。この充実したプログラムも今後の中国フィットネスクラブに大いに参考になるといえる。

3. 中国フィットネスクラブ会員の実態と社会階層

1) 調査対象者の属性

会員の年齢層は、20歳代が59%で最も多く、さらに20歳代以下の若年層の比率をみると、全体で73.7%であり、クラブ会員の大半が20歳代以下の若者であることが分かる。

表1 調査対象者の属性

	10代	20代	30代	40代以上	計
男	13 14.8%	48 54.5%	16 18.2%	11 12.5%	88 100%
女	20 14.3%	87 62.1%	17 12.1%	16 11.4%	140 100%
計	33 14.5%	135 59.2%	33 14.5%	27 11.8%	228 100%

2) クラブ会員の社会階層

(1) 学歴

クラブ会員の学歴は、高校卒業以上が93%を占め、特に大学卒または在学中の者が43.9%で、非常に高いことが分かる。フィットネスクラブが新しい事業であること、またクラブ会員になるにはかなりのお金がかかることから、高学歴者が多いといえる。

表2 クラブ会員の学歴

	小学校	中学校	高校	専門学校	大学以上	計
男	4 4.5%	5 5.7%	19 21.6%	27 30.7%	33 37.5%	88 100%
女	3 2.1%	4 2.9%	37 26.4%	29 20.7%	67 47.9%	140 100%
計	7 3.1%	9 3.9%	56 24.6%	56 24.6%	100 43.9%	228 100%

(2) 職業

会員の職業は、男女とも約半数が学生であった。その他では「管理職」「準専門職」「専門職」等の上級ノンマニュアルの職業従事者がそれぞれ10%程度であり、マニュアル的職業あるいは農林漁業従事者はほとんどいな

い。

表3 クラブ会員の職業

	1	2	3	4	5	6	7	計
男	9 10.2%	9 10.2%	13 14.8%	4 4.5%	8 9.1%	2 2.3%	43 48.9%	88 100%
女	12 8.6%	14 10.0%	17 12.1%	12 8.6%	14 10.0%	1 0.7%	70 50.0%	140 100%
計	21 9.2%	23 10.1%	30 13.2%	16 7.0%	22 9.6%	3 1.3%	113 49.6%	228 100%

1. 専門職：医師、弁護士、大学の先生、研究者
2. 準専門職：大学以外の先生、技師、プログラマーなど
3. 管理職：課長以上
4. 事務職：タイピスト、パンチャー、一般事務など
5. 販売関係：店員、セールスマンなど
6. 農林漁業経営者、従業者
7. 学生（小学校から大学院まで）

(3) 所得

会員の世帯月収は1000元から5000元までが約半数を占めている。20歳代以下の若者が中心であるということもあるが、会員は中所得者が大半といえることができる。

表4 クラブ会員の世帯月収

	～1000元	～3000	～5000	～8000	～10000	～20000	20000～	総計
男	12 13.6%	21 23.9%	16 18.2%	18 20.5%	10 11.4%	5 5.7%	6 6.8%	88 100%
女	16 11.4%	38 27.1%	41 29.3%	25 17.9%	11 7.9%	7 5.0%	2 1.4%	140 100%
計	28 12.3%	59 25.9%	57 25.0%	43 18.9%	21 9.2%	12 5.3%	8 3.8%	228 100%

(4) 生活様式

日本の1975年SSM (social stratification and social mobility) 調査⁹⁾の生活様式の質問項目を参考に、9つの余暇活動について調査を行い、SSM調査同様、最近1年間に、そのような活動が「ない」を0点、「少しある」1点、「かなりある」を2点に得点化し、生活様式を測定した。表5は各項目の平均である。

表5 クラブ会員の余暇スコア

	映画	外食	テニス	登山	読書	国内旅行	外国旅行	展覧会	音楽
男	1.02	1.59	0.44	0.67	0.85	0.67	0.06	0.43	0.53
女	1.21	1.54	0.59	0.89	1.14	0.69	0.14	0.59	0.79
全体	1.14	1.56	0.53	0.68	1.03	0.68	0.11	0.53	0.69

最も高いスコアを示したものは男女ともに「外食」で、次に「映画」「読書」などである。「外国旅行」は若年層が多いこと、また中国の海外旅行がまだまだ低調なことから極端に低いスコアとなった。「テニス」や「登山」のスポーツもそれほど高くはなく、それらスポーツはまだ

一般的とはいえないようである。

次にSSM調査ではこの9項目の余暇スコアを加算し、以下のような5段階に生活様式を類型化している。

表6 生活様式カテゴリー

余暇スコア	生活様式カテゴリー
0-1	1
2-3	2
4-5	3
6-7	4
8-18	5

このカテゴリーを用いて、会員の生活様式を集計したものが表7である。

表7 クラブ会員の生活様式

	1	2	3	4	5	計
男	0.0%	14 15.9%	19 21.6%	32 36.4%	23 26.1%	88 100%
女	2 1.4%	11 7.9%	30 21.4%	30 21.4%	67 47.9%	140 100%
計	2 0.9%	25 11.0%	49 21.5%	62 27.2%	90 39.5%	228 100%

全体ではカテゴリー5が最も多く約40%を占め、次にカテゴリー4 (27.2%) である。この2つのカテゴリーで会員の3分の2を占めている。平均値では男性3.73、女性4.06、全体で3.93を示し、女性のほうが生活様式は高いことがわかった。日本の1975年SSM調査の生活様式の平均値が2.9、またそれを参考に調査を行った丸山²⁾の平均値も2.74であった。このことから今回の調査対象者の生活様式はかなり高いことがわかる。

フィットネスクラブ会員の社会階層を、学歴、職業、所得、生活様式の指標から測定したが、学歴は高く、職業は学生が半数を占め、所得は中程度、生活様式が高いという結果が得られた。これは社会階層を階層クラスターから分析しようとした、前述の1975年SSM調査や丸山の指摘する「社会的地位達成の出発期における成員に典型的」な若年エリート層の階層と同様であり、今回の中国フィットネスクラブ会員も同様の社会階層と特徴づけることができよう。

3) クラブ活動の参加形態

クラブに定期的に参加する会員は49%を占め、「時間の許す限り参加」を含めると全体で70%近くにのぼり、非常に積極的な姿勢で参加していることがわかる。特に男性のほうが積極的といえる。

表 8 クラブ活動の参加形態

	定期的参加	時間の許す限り	不定期に参加	友達からの誘い	その他	計
男	46 52.3%	17 19.3%	12 13.6%	12 13.6%	1 1.1%	88 100%
女	66 47.1%	28 20.0%	26 18.6%	17 12.1%	3 2.1%	140 100%
計	112 49.1%	45 19.7%	38 16.7%	29 12.7%	4 1.8%	228 100%

4) クラブ参加の目的

フィットネスクラブ参加の目的で最も多いのは、「健康や体力づくり」と「美容や肥満解消」の2項目で、全体ではそれぞれ51.8%、50.9%であった。特に女性の場合はいずれも6割近い。またこの2項目は「美容・肥満」の男女の40歳代を除くと、年代別にも大きな違いはない。次に「気晴らし」(全体で33.8%)や「友達をつくる」(全体で27.2%)などである。「スポーツ技術の向上」では男性が女性の倍近く回答し、特に10歳代の男性が突出していた。わが国の同様の調査(内閣府「体力・スポーツに関する世論調査」2004)³⁾と比較すると、中国の場合、「美容や肥満解消」(内閣府調査では10.5%)と「精神修養」22.4%(同3.6%)が非常に高く、逆に「楽しみ・気晴らし」33.8%(同54.5%)が非常に低いことが特徴的である。

表 9 クラブ参加の目的

	健康・体力	美容・肥満	スポーツ技術	社会交際しむ	気晴らし	友達をつくる	楽しみ	精神修養	その他
男	37 42.0%	36 40.9%	28 31.8%	15 17.0%	30 34.1%	20 22.7%	32 36.4%	5 5.7%	11 12.5%
女	81 57.9%	80 57.1%	23 16.4%	15 10.7%	47 32.9%	31 22.1%	30 21.4%	11 7.9%	13 9.2%
計	118 51.8%	116 50.9%	51 22.4%	30 13.2%	77 33.8%	51 22.4%	62 27.2%	16 7.0%	24 10.5%

5) クラブ活動の満足度

クラブ活動の満足度について、クラブの雰囲気など7項目について、「満足している」から「不満である」までの4段階尺度で評価してもらった。それぞれの回答を4点から1点まで得点化し、性・年代別に平均値を算出したものが表10である。

表 10 クラブ活動の満足度

	雰囲気	指導者	技術	会費	組織	設備	理解
平均	3.17	3.11	2.95	2.74	2.92	2.74	3.08
標準偏差	0.698	0.780	0.815	0.864	0.847	0.890	0.835
平均	3.08	3.06	2.91	2.81	2.84	2.66	2.96
標準偏差	0.730	0.676	0.658	0.634	0.626	0.717	0.704
平均	3.11	3.08	2.93	2.78	2.87	2.69	3.00
標準偏差	0.718	0.717	0.720	0.730	0.719	0.788	0.757

7つの項目によるクラブの満足度は男女ともに同じような傾向を示し、またいずれの項目もかなり高いことわかる。特に「クラブの雰囲気」や「指導者」、「家族の理解」の項目は平均値が3.0を越え非常に高いといえる。7項目中では「設備」と「会費」の項目の満足度がやや低い値となっている。また年代で比較すると、男女ともに、全体的に若年層ほど満足度が高いという傾向がみられた。

IV. まとめ

1. 日本のフィットネスクラブの歴史と概要

中国に比べフィットネスクラブ先進国である日本のフィットネスクラブの歴史を探ることは、今後、中国でも予想される方向性や課題等について示唆を得ることができらるであろう。

日本の場合、フィットネスクラブが誕生して約25年が経過している。当初のブームやバブル経済による乱立傾向を経て、バブル経済崩壊とともに、現在フィットネスクラブ業界は成熟期を迎えているといつてよいだろう。近年では中高年齢者の会員の増加傾向が顕著であることも見逃せない。高齢社会の到来とともに、高齢者の健康意識の向上、レジャー意識の変化に着目した客層のシフトであり、フィットネスクラブの市場構造を変化させている。

中国におけるフィットネスクラブも歴史的には約20年の歴史をもつが、まだまだこれから成長期を迎える業界といえる。日本のフィットネスクラブが経験した景気をはじめとする様々な障害と、それに対処する企業努力や工夫は、今後大いに参考になるといえよう。

2. 中国フィットネスクラブの今後の課題

1) 社会の課題

①国民の健康意識とレジャー意識を高めること

1980年以降、中国経済は急速に発展し、国民、特に都市部の住民は確実に豊かになった。都市部の人々の所得は20年前より、数10倍にもなったといえる。しかし国民の平均寿命はあまり変化していない。これは国民の健康意識がまだ低いレベルにあることが一因でもある。自らの健康増進や運動・スポーツ活動に対する国や行政への依存的体質から、自主的、自発的、また受益者負担の姿勢や考え方を浸透する必要があると考えられる。

②フィットネス産業に対する国、関係団体の支援

全国的にみて、フィットネス産業は現在、都市部だけで盛んな新産業である。したがって例えば施設管理者や指導者の資格付与制度、設備・備品等の規格、指導法やプログラム開発など、フィットネス産業に関わる様々な側面で国や関係団体の支援が必要である。これらの法規や制度の制定、そのための支援策によって、安全で効果的、また快適なクラブが誕生するであろう。そしてこのことがクラブの信頼性を増し、フィットネス産業の発展に大きく寄与するものとなる。

2) フィットネスクラブの課題

ア) 市場調査の導入

イ) 施設・設備の充実

ウ) プログラムサービスの充実

エ) 会費の軽減と会員獲得の努力

オ) 指導者養成

以上の問題だけではなく、中国のフィットネスクラブにはまだ多くの課題や問題点もあるだろう。その課題を解決するため、国や関係機関、またクラブ経営者や指導者は今後も努力が必要である。そうすることによって、いずれ何年後かには中国のフィットネスクラブも先進諸国に追いつく繁栄したものになることを期待したい。

3. 今後の研究課題

本研究では中国長春市のフィットネスクラブを事例として、クラブの実態とクラブ会員の社会階層等について調査を行った。日本の熟成したクラブの現状と比較し、中国のフィットネスクラブはその施設や設備、プログラムや指導者、また会員の社会階層に関しても、まだまだ発展段階であることがわかった。

しかし今回の調査では、クラブの経営状況については調査できなかった。中国の経営は政府や民間、またそれらの合弁など多様である。今後フィットネスクラブが安定した経営を行うためには、都市規模や経済レベルによって、どのような方法がよいのか今後検討したい。また、中国もこれからますます発展し、社会階層やその構成比率も大きく変わると考えられる。フィットネスクラブを

含むスポーツと社会階層の関係について、今後とも研究を続けたいと考える。

参考文献

- 1) クラブビジネスジャパン編「クラブマネジメント」vol33, 2001年
- 2) 丸山富雄「社会階層およびライフスタイルからみた一般成人のスポーツ参与」菅原禮編著『スポーツ社会学への招待』第6章, 不味堂, 1990年
- 3) 内閣府, 体力・スポーツに関する世論調査, 2004
- 4) 日本フィットネス産業協会, 日本健康スポーツ連盟編「フィットネス産業基礎データ2002」2002年
- 5) 仙台キリンスポーツクラブホームページ
- 6) 孫宏立「中国健身倶楽部発展」上海体育大学出版社, 2002年
- 7) 張功偉「中国体育倶楽部総論」北京体育大学出版社編「中国体育年報」2001年5月刊
- 8) 富永健一「日本の階層結構」東京大学出版会, 1984年
- 9) (財)余暇開発センター編「レジャー産業の経営動向」同友館, 1998年
- 10) (財)余暇開発センター編「レジャー白書99」, 1999年